様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２７日現在

機関番号：２７１０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５２００２５
研究課題名（和文）集合的記憶を媒介とした世代間コミュニケーションに関する現象学的研究

研究課題名（英文）Phenomenological Study on the Theory of Intergenerational Communication through the Medium of the Collective Memory

研究代表者
神谷　英二（KAMIYA EIJI）
福岡県立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：４０３１６１６２

研究成果の概要（和文）：まず、アンリ現象学研究を通じて、根源的な身体の自己自身への直接的な現れが記憶の可能性の原理であり、個別の自我は基底として根源にある情感性から発生し、これが集合的記憶を可能にすることを解明した。次に、ベンヤミンの記憶論を研究することにより、固有名と幼年時代の記憶が集合的記憶において重要な役割を果たすことを明らかにした。この研究成果により、世代間コミュニケーションの構造を解明するための哲学的基礎が獲得された。

研究成果の概要（英文）：First of all, through the investigation into Michel Henry’s phenomenology, it became obvious that the possibility of memory exists under the condition that the archi-body originally appears at itself, and the individual ego generates by the transcendental affectivity which makes the collective memory possible. Secondly, building on Walter Benjamin’s theory of memory, it is concluded that the proper noun and the memory in the childhood play a crucial role in the collective memory. Through this research program, we found the philosophical basis to explicate the structure of the intergenerational communication.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	500,000	150,000	650,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：哲学・応用倫理学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：現象学、記憶、情感性、集合的記憶、世代性、世代間コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

現在、わが国においては、一連の構造改革を背景にした、急速な社会制度と経済環境の変化のために、さまざまな場面で、「世代間衡平性」が大きく崩れていると言われている。特に社会保障政策や国の財政における債務増加について議論するとき、世代間の不公平感は極めて大きくなる。また、現在、従来の終身雇用制を根幹においた労働慣行が急速に変化し、若者の就業困難が大きな社会的問題となっている。ここにも「世代間衡平性」の問題が含まれていると言える。さらには、深刻化する地球温暖化等の地球環境問題の克服のためには、国際的な制度設計と合意形

成が必要であり、これに対処するために、環境倫理学においては「世代間倫理」が重要な理論として注目されている。

これまでの「世代間衡平性」や「世代間倫理」に関する研究は、緊急の現実的課題に応えるために実践的・応用的研究が優先し、必ずしも十分な哲学的・倫理学的な理論的基盤に基づいて展開されているとは言えない。

このような状況を考慮するならば、「世代間衡平性」や「世代間倫理」の哲学的・倫理学的な理論的基礎を解明することが重要であることは明らかである。これらの研究のためには、まず、「世代性」そのもの、世代の発生、世代間の連鎖、世代間コミュニケーション等について、哲学・倫理学の方法による理論的研究を行い、研究成果を実証諸科学に提供することが、哲学・倫理学の研究者にとって緊急かつ重大な責務であると考えられる。

こうした研究にとっては、ただ単に直接、「世代性」や世代間の連鎖等に焦点を絞って研究するだけでなく、世代間を媒介するものに着目し、世代間コミュニケーションの構造を明らかにすることが重要であると考えられる。本研究においては、そうした機能をもつと考えられるもののうち、特に「集合的記憶」に焦点をあてて、研究を展開する。世代間コミュニケーションの場面においては、各世代がもつ「集合的記憶」のあり方がコミュニケーションの円滑さに大きく影響すると考えられることから、本研究課題では、「集合的記憶」に着目する。

本研究課題に関わる先行研究としては、フッサールが最晩年の7年間（1930～1937年）に残した「世代性」(Generativität)に関する遺稿がある。フッサールが考える「世代性」とは、意味の世代発生(Generation)に関わるものであり、生物学的な種の反復などではなく、超越論的概念である。経験的な世代の連鎖、誕生、死、性などは、この超越論的な「世代性」によってはじめてそれらの意味が構成されるのである。

さらに、A. J. スタインボックは、「世代性」に関連するフッサールの草稿の精緻な読解に基づき、こうしたフッサール晩年の思索を継承・発展させ、「世代発生的現象学」（generative phenomenology）を提唱している。これは、発生的現象学の派生的な一分野なのではなく、静態的現象学および発生的現象学の後にやってくる現象学の第3の方法と考えられている。

そして、この新たな方法が問題にするのは、規範的重要性をもった、地理-歴史的、相互主観的意味の生成であり、そうした意味の世代発生である。

また、「集合的記憶」に関しては、これまで哲学・倫理学分野での研究は少なく、隣接分野の研究成果を踏まえつつ、研究を進める必要がある。まず、社会学において、モーリス・アルプヴァクスが行った研究が重要である。（Maurice Halbwachs, *La mémoire collective*, P.U.F., 1950.）哲学分野では、リクールが『記憶・歴史・忘却』（Paul Ricoeur, *La mémoire, l'histoire, l'oubli*, Seuil, 2000.）でこの問題を考察しており、この成果を踏まえるならば、現象学的方法による解明が可能であると考えられる。また、「集合的記憶」について考察する際には、ミシェル・アンリの「共ーパトス」の概念も大いに参考になるであろう。（Michel Henry, *Phénoménologie matérielle*, P.U.F., 1990.）

また、他に参考にすべき隣接分野の研究としては、歴史学の成果があげられる。具体的には、フランスのピエール・ノラを中心としたアナール学派の『記憶の場』を巡る研究がある。（Pierre Nora(dir.), *Les Lieux de mémoire* (3 parties: Ⅰ La République, Ⅱ La Nation , Ⅲ Les France), Gallimard, 1984-1986.）さらに、記憶と「集合的記憶」の研究にとっては「忘却」が大きな役割を果たすが、これに関しては文学研究の分野で、ハラルト・ヴァインリヒが重要な研究成果を残しており、本研究にとっても導きの糸となると考えられる（Harald Weinrich, *Lethe: Kunst und Kritik des Vergessens*, C.H. Beck, 1997.）。

「世代性」に関しては、上記の世代発生的現象学の方法が重要であり、課題解決のために最も有効であると考えられる。神谷（研究代表者）は、世代発生的現象学に関する文献をわが国で初めて翻訳・紹介した実績をもつ。（アンソニー・J. スタインボック「限界現象と経験の限界性」、『思想』2000年第10号、No.916、岩波書店、2000年、pp.218-243）また、ここで紹介した方法を用いて、世代発生的現象学に関する本格的研究を極めて早い時期に発表している。（神谷英二「規範の生成―世代発生的現象学に基づく倫理学の可能性―」、『西日本哲学会年報』第9号、西日本哲学会、2001年、pp.107-120）

また、神谷はすでに、人間の記憶と情感性の関係に関する現象学的研究を開始し、研究成果の一部を公表している。（神谷英二「情感性と記憶－アンリ現象学による試論－(1)」『福岡県立大学人間社会学部紀要』第14巻第1号、福岡県立大学人間社会学部、2005年、pp.21-36、神谷英二「記憶の触発と変容」2006年度九州大学哲学会大会、特別発表、2006年9月30日、九州大学）

以上の研究過程で、人間の記憶と歴史記述における集合的記憶の重要性に着目するに至り、これを「世代性」と世代間コミュニケーションの構造の解明に適用するという研究上の着想を得、本研究課題に至ったのである。

２．研究の目的

「記憶」に関する現象学、解釈学およびベルクソン哲学による諸理論をもとに、「集合的記憶」について現象学的方法によって記述し、その構造を理論的に明らかにする。それを踏まえて、「世代性」に関する研究を行い、世代の連鎖と世代間コミュニケーションにおける「集合的記憶」の役割をスタインボックにより提示された世代発生的現象学の方法により、理論的に明らかにし、「世代間倫理」と「世代間衡平性」に関する研究に理論的基礎を与えることをめざした。

３．研究の方法

(1) 2007 年度

フッサール現象学を中心に現象学的記憶論と「世代性」に関する研究文献の収集、精査を行った。それと同時に、記憶論については西洋哲学の他分野および心理学・社会学等の隣接領域の文献収集、精査をもあわせて遂行した。

「集合的記憶」について研究するためには、まず個別の自我における記憶論について十分な研究を行うことが不可欠である。収集した文献資料をもとに、フッサールとミシェル・アンリの現象学における記憶論を中心にして、個別の自我における記憶の研究を進めた。その際、ベルクソンをはじめとする西洋哲学の他分野、および心理学・社会学等の隣接領域の研究成果をも視野に入れて考察を進めた。

(2) 2008 年度

前年度に引き続き、フッサール現象学を中心に現象学的記憶論と「世代性」に関する研究文献の収集、精査を行った。また同時に、西洋哲学の他分野および心理学・社会学等の隣接領域の文献収集、精査も行った。

さらに、前年度の個別の自我における記憶に関する研究成果を踏まえて、「集合的記憶」に関する研究を本格的に開始した。

「集合的記憶」に関する研究においては、モーリス・アルプヴァクスの研究、ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』およびヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論』（Walter Benjamin, *Das Passagen-Werk*, Suhrkamp, 1982）を主な研究対象とした。

なお、これまでの研究成果の一部を哲学会第 47 回研究発表大会（東京大学）と日本現象学・社会科学会第 25 回大会・シンポジウム（武蔵大学）において発表し、そこでの参加者からの批判・提案を本研究課題に関する以後の研究活動に反映させた。

(3) 2009 年度

前年度の研究成果を踏まえて、「集合的記憶」に関する研究を継続し、関係文献の収集と精査および理論構築を行った。

この年度の「集合的記憶」に関する研究においては、「土地の名」の記憶と「集合的記憶」の関係を解明することを主要な課題とした。また、文献資料としては、『パサージュ論』をはじめとする、ヴァルター・ベンヤミンの記憶論に関わる諸著作、アルフレッド・シュッツの帰郷者論、モーリス・アルプヴァクスの研究、および、ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』を主な研究対象とした。

(4) 2010 年度

これまでの研究成果を踏まえて、「集合的記憶」に関する研究を継続し、関係文献の精査および理論構築を行った。

この年度の「集合的記憶」に関する研究においては、引き続き、「土地の名」の記憶とそれに触発されて形成される「集合的記憶」の関係を解明することが主要な課題となる。また、文献資料としては、『パサージュ論』をはじめとする、ヴァルター・ベンヤミンの記憶論に関わる諸著作、アルフレッド・シュッツの帰郷者論、モーリス・アルプヴァクスの研究、および、ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』を研究対象とした。

なお、2010 年度は、今回の補助による最終研究年度にあたることから、これまで４年間の成果をまとめた報告書を作成し、研究成果を広く公表した。

４．研究成果

(1) 2007 年度の研究成果

現象学的哲学の方法を用いて、「世代間コミュニケーション」のあり方を解明する手がかりとして「集合的記憶」について研究するためには、まず個別の自我における記憶論について十分な研究を行うことが不可欠である。2007 度は、研究代表者による従来の研究成果を踏まえ、ミシェル・アンリの現象学における記憶論を中心にして、個別の自我における記憶について研究を進めた。その結果、アンリの現象学に基づけば、人間の身体は力能であるとともに、「直接的知」であり、この身体の知こそが記憶であることが明らかになった。そして、「私の身体の存在そのもの」である習慣が記憶の根拠であり、私たちの身体はすべての習慣の総体であり、私たちの身体の根源的な記憶こそが習慣である。さらに、記憶の原理は、＜原-身体＞(Archi-Corps)であり、表象的記憶も＜原-身体＞に基づくものであることが明らかになった。より詳しく述べれば、＜原-身体＞の自己自身への直接的到来、その直接的覚知としての＜原-開示＞(Archi-Révélation)こそが、再認と記憶の可能性の原理なのである。こうした研究成果により、今後、次の研究段階として、個別の自我における記憶と情感性との

関係を解明し、「集合的記憶」の分析を開始するために不可欠な理論的基盤が獲得されたのである。

さらに、記憶論に関する西洋哲学の他分野および心理学・社会学等の隣接領域の文献収集・精査の結果、本研究開始時の見通しと異なり、「集合的記憶」と「世代間コミュニケーション」に関する哲学的理論の構築には、ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論』における「記憶」、「集団の夢」、「目覚め」、「世代」、「ファンタスマゴリア」などの概念について探究することが不可欠であるとの研究方法上の新たな見通しを得ることができた。

(2) 2008 年度の研究成果

前年度の研究成果を踏まえ、M. アンリの現象学における記憶論を中心に、「集合的記憶」に関する研究を開始した。この研究の問いは、「集合的記憶が可能となる超越論的な根拠は何か」である。これに対して、以下の４点が明らかになった。①情感性は、直接的パトスとして身体の身体性である。② 記憶の根拠は、「私の身体の存在そのもの」である習慣であり、身体の身体性である。③超越論的情感性である生は、個々の自己の＜基底＞であると同時に他者の生の＜基底＞でもあり、共同体の＜基底＞でもある。④記憶の根拠は身体の身体性でもある超越論的情感性であり、個体化された自我は＜基底＞である超越論的情感性から発生する。これが、個別の自我を超えて共有される集合的記憶が可能となる超越論的根拠である。

また、これと並行して、W. ベンヤミン『パサージュ論』における記憶論に関する研究を開始した。この研究の問いは、「遊歩者は集団の夢からどのようにして目覚めるのか」である。遊歩者とは「１９世紀の首都・パリ」で目的をもたずに街路を彷徨う人物像であり、「観察する人」「陶酔する人」である。「集団の夢」とは進歩を信じてやまない１９世紀という時代の集合的意識が見る夢である。群衆はこれから目覚めることはないが、遊歩者には「弁証法的形象」を構成しうる商品を通路とし、「認識が可能となる今」である覚醒の瞬間が到来しうる。この覚醒は「想起のコペルニクス的転回」と呼ばれ、「歴史的唯物論」による歴史を構成する「歴史学の新たな弁証法的方法」となる想起でもあり、遊歩者は「歴史の主体」になりうる存在者でもある。

以上により、「世代間コミュニケーション」の解明に不可欠な２つの理論的基礎を獲得できた。

(3) 2009 年度の研究成果

前年度のヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論』における記憶論に関する研究成果を踏まえ、本研究課題の解明に不可欠な固有名と記憶に関わる研究を開始した。この研究の問いは、「固有名は人間の記憶とどのように関わるのか。固有名は集合的記憶にどのような影響を与えているのか」というものである。

本研究は、ベンヤミンの初期言語論を主要な手がかりに、これらの問いに応えるものである。2009 年度の研究では、まず、ベンヤミン『言語一般および人間の言語について』の成立事情をゲルショム・ショーレムとベンヤミンによる書簡などの記録により明らかにした。次に、このテクストの構成を確認し、その上で、言語と名・名づけの関わりについて解明を進め、固有名の理論へと至り、最後にベンヤミン独自の「翻訳」概念について考察した。この研究により、固有名としての人間の名は、神の言語と人間の言語の中間的審級であり、誕生とともに受け取られた所与であるとともに、永続的な創造の源泉であることが明らかになった。また、これとともに、翻訳とは、神が人間に委託したとおりに、人間が名なきものを名づけることであることが解明された。

なお、以上の研究成果を集合的記憶の解明につなげるためには、固有名に関する具体的経験を分析することが必要であり、2009 年度後半では 2010 年度の研究に向けて、ベンヤミンのテクスト（『ベルリン年代記』、『1900 年頃のベルリンの幼年時代』）を対象に、地名（街路名）と人名に関わる経験の分析を行った。

(4) 2010 年度の研究成果

これまでの研究成果を踏まえ、集合的記憶が世代間コミュニケーションに果たす役割を解明するために、ベンヤミンの著作をもとに、固有名に関する具体的経験とその起源となる幼年時代の記憶に関する研究を行った。

ベンヤミンは、幼年時代の記憶に特別な意味を与えている。2010 年度の研究の問いは、「幼年時代の記憶は集合的記憶とどのように関わるのか」である。テクストとして、『ベルリン年代記』、『1900 年頃のベルリンの幼年時代』、『パサージュ論』を主に扱った。最初に、ベンヤミンにおける子どもの特権性を明らかにした。子どもは進歩を信じてやまない 19 世紀という時代の集合的意識が見る「集団の夢」からの覚醒の契機となりうるために特権的なのである。次に、神話的世界に生きる幼年時代からの断絶について考察し、同時に、一度断絶した幼年時代を想起する技法について解明した。ベンヤミンは記憶を媒体と考えており、想起は不動の過去の貯蔵所を計画的に開くという行為ではなく、何度も繰り返すべき探究なのである。こうした探究により、一度断絶した幼年時代の形象をいまここに取り戻すことが可能となる。さらに、幼年時代の記憶の場としての Hof の役割を明らか

にし、その後幼年時代の記憶と集合的記憶のつながりを素描した。そこでは自己の幼年時代の時間と自己以外の誰かの幼年時代の時間が重なり合い融合した現象としての「二重になった地面」とそれに対する「逆向きのデジャ・ヴュ」の重要性が解明された。最後に、幼年時代の記憶と集合的記憶の交差を探究する上で、他者の言葉が織りなしている過去の記憶を読む空間と自己の私的な過去の記憶を読む空間の両者が相互に浸透し合う場面を提示するテクストを多く含む『ドイツの人びと』がもつ意味を示した。

(5)今後の課題と展望

本研究課題の成果を踏まえて、神谷は今後、以下のような３つの研究プロジェクトを手がける予定である。

①基礎研究
「課題解決現象学による世代間コミュニケーション理論の構築」
②検証作業
「『記憶の場』を活用した集合的記憶論の検証」
③応用研究
「集合的記憶に基づく世代間で異なる『物語』をまちづくりに活用する技法開発」

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①神谷英二「幼年時代の記憶と集合的記憶(1)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』第 19 巻第 2 号、福岡県立大学人間社会学部、2011 年、65-76 頁（査読無）
http://www.fukuoka-pu.ac.jp/kiyou/kiyo19_2/1902_kamiya.pdf

②神谷英二「固有名と記憶(1)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』第 18 巻第 2 号、福岡県立大学人間社会学部、2010 年、13-25 頁（査読無）
http://www.fukuoka-pu.ac.jp/kiyou/kiyo18_2/1802_kamiya.pdf

③神谷英二「遊歩者・記憶・集団の夢―ベンヤミン『パサージュ論』による記憶論構築のために―」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』第 17 巻第 2 号、福岡県立大学人間社会学部、2009 年、67-79 頁（査読無）
http://www.fukuoka-pu.ac.jp/kiyou/kiyo17_2/1702_kamiya.pdf

④神谷英二「情感性と記憶―アンリ現象学による試論―(2)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』第 16 巻第 2 号、福岡県立大学人間社会学部、2008 年、1-14 頁（査読無）
http://www.fukuoka-pu.ac.jp/kiyou/kiyo16_2/1602_kamiya.pdf

〔学会発表〕（計２件）

①神谷英二「直面する課題から逃げず、小銭で払い続けるために―私の哲学的戦略メモ―」、日本現象学・社会科学会第 25 回大会・シンポジウム 2「現象学と社会科学の接点をもとめて」提題、2008 年 12 月 7 日、武蔵大学

②神谷英二「情感性・習慣・記憶」、哲学会第 47 回研究発表大会、2008 年 10 月 25 日、東京大学

〔図書〕（計１件）

神谷英二『集合的記憶を媒介とした世代間コミュニケーションに関する現象学的研究（課題番号：19520025）平成 19-22 年度科学研究費補助金・基盤研究（C）・研究成果報告書』福岡県立大学、2011 年、全 87 頁

〔その他〕
書評
神谷英二（武内　大著『現象学と形而上学：フッサール・フィンク・ハイデガー』知泉書館、2010 年）関する書評（実存思想協会編『実存思想論集』第 26 巻、理想社、2011 年 6 月刊行予定）

６．研究組織
(1)研究代表者
神谷　英二（KAMIYA EIJI）
福岡県立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：４０３１６１６２

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：